

# 日蓮大聖人御書全集

ひょうえのさかんどのごしよ

## 兵衛志殿御書

しんぷにゆうしん こと

(親父入信の事)

新版  
1492  
〜  
1494

ひょうえのさかんどのごしよ しんぷにゆうしん こと

# 兵衛志殿御書 (親父入信の事)

こうあんがんねん

がつ ちち

さい

いけがみむねなが

弘安元年 ('78) 9月9日

57歳

池上宗長

ひさ

承

そうら

覚

束

そうらう

久しくうけたまわり候わねば、よくおぼつかなく候。

なに

不思議

たいふのさかんど

殿

何よりもあわれにふしぎなることは、大夫志殿ととのとの

おんこと

そうらう

御事、ふしぎに候。

常

様

よ末

そうら

しょうにん

けんじん

皆

つねざまには、代すえになり候えば、聖人・賢人もみな

隠

讒

人

佞

人

和讒

曲

理

もの

かくれ、ただ、ざんじん・ねいじん・わざん・きよくりの者

くに

じゅうまん

み

そうら

たと

みず

のみこそ国には充滿すべきと見えて候えば、喩えば、水

少

いけ 騒

かぜ吹

たいかい

静

すくなくなれば池さわがしく、風ふけば大海しずかならず。

よすえ そうら 早 魃 疫 癘 おおあめ おおかせ吹

代末になり候えば、かんばち・えきれい・大雨・大風ふき

重 そうら ひろ こころ 狭 どうしん ひと じゃけん

かさなり候えば、広き心もせばくなり、道心ある人も邪見

み そうら たにん ふぼ

になるとこそ見えて候え。されば、他人はさておきぬ、父母

ふさい きようだい あらせ 猟師 鹿 猫 鼠

と夫妻と兄弟と諍うこと、れつしとしかと、ねことねずみ

鷹 雉 み そうろう

と、たかときじとのごとしと見えて候。

りようかんとう てんま ほっし しんぷ さえもんのたいふどの 賺

良観等の天魔の法師らが、親父・左衛門大夫殿をすかし、

和 殿 原 ににん うしな との みこころかしこ

わどのばら二人を失わんとせしに、殿の御心賢くして

にちれん 諫 おん ふた 輪 しゃ

日蓮がいさめを御もちいありしゆえに、二つのわの車を

助 ふた あし ひと 担 ふた はね 飛

たすけ、二つの足の人をになえるがごとく、二つの羽のとぶ

にちがつ いったいしゆじよう たす

がごとく、日月の一切衆生を助くるがごとく、兄弟の

おんちから しんぷ ほけきよう い たま おんはか

御力にて親父を法華経に入れまいらせさせ給いぬる御計

きへん おんみ

らい、ひとえに貴辺の御身にあり。

しんじつ きよう おん 理 よすえ ぶっぼう

また真実の経の御ことわりは、代末になりて仏法あなが

乱 だいしようにんよ い み そうろう たと

ちにみだれば、大聖人世に出ずべしと見えて候。喩えば、

まつ 霜 のち き おう み きく くさ のち せんそう み

松のしもの後に木の王と見え、菊は草の後に仙草と見えて

そうろう よ 治 けんじんみ よ みだ

候。代のおさまれるには賢人見えず、代の乱れたるにこそ

しようにん ぐにん あらわ そうら へいのさえもんの 相 模 どの

聖人・愚人は顕れ候え。あわれ、平左衛門殿・さがみ殿の

にちれん もち そうら 過 もうここく ちようし

日蓮をだに用いられて候いしかば、すぎにし蒙古国の朝使

頸

き

そつら

悔

のくびはよも切らせまいらせ候わじ。くやしくおわすらん。

にんのうはちじゆういちだいあんとくてんのう

もう だいおう

てんだいぎす みよううんとう

人王八十一代安徳天皇と申す大王は、天台座主・明雲等

しんごんしとうすうひやくにん 語

みなもとのうししようぐんよりとみ じようぶく

の真言師等数百人かたらいて、源右将軍頼朝を調伏せ

かえ ほんにん っ

みよううん よしなか き

しかば、「還つて本人に著きなん」とて、明雲は義仲に切ら

あんとくてんのう

さいかい

しず たも

にんのうはちじゆうに

さん し

れぬ、安徳天皇は西海に沈み給う。人王八十二・三・四、

おきのほうおう

あわのいん

さだのいん

とうぎん

いじようしにん

ぎす じえんそうじよう

隠岐法皇・阿波院・佐渡院・当今、已上四人、座主慈円僧正・

おむろ

みいとう

しじゆうよにん

こうそうとう

へいしようぐんよしとき

御室・三井等の四十余人の高僧等をもつて平将軍義時を

じようぶく

たも

かえ

ほんいん

っ

調伏し給うほどに、また、「還つて本人に著きなん」とて、

かみ

しおう

しまじま

はな

たま

上の四王、島々に放たれ給いき。

この大悪法は、弘法・慈覚・智証の三大師、法華経最第一の釈尊の金言を破つて法華最第二・最第三、大日経最第一と読み給ひし僻見を御信用あつて、今生には国と身とを  
ほろぼし、後生には無間地獄に墮ち給ひぬ。

今度はまた、この調伏三度なり。今、我が弟子等、死し

たらん人々は仏眼をもつてこれを見給うらん。命つれなく

て生きたらん眼に見よ。国主等は他国へ責めわたされ、

調伏の人々は、あるいは狂い死に、あるいは他国、あるいは

は山林にかくるべし。教主釈尊の御使いを二度までこうじ

でしとう

牢

い

ころ

がい

をわたし、弟子等をろううに入れ、あるいは殺し、あるいは害

ところ

くに

追

ゆえ

とがかなら

くにぐに

し、あるいは所・国をおいし故に、その科必ずその国々・

ばんみん

み

いちいち

びやくじい

こくじい

万民の身に一々にかかるべし。あるいはまた白癩・黒癩、

もろもろ

あくじゆうびよう

ひとびと

多

わ

でしとう

よし

諸の悪重病の人々おおかるべし。我が弟子等、この由を

ぞん

たま

きようきようきんげん

存ぜさせ給え。恐々謹言。

くがつここのか

九月九日

にちれん

かおう

ふみ

べつ

ひようえのさかんど

そう

わ

いちもん

この文は、別しては兵衛志殿へ、総じては我が一門の

ひとびとごらん

たにん

き

たも

人々御覧あるべし。他人に聞かせ給うな。

日蓮

花押